

42173

教科書文庫

4
815
42-1923
20000 45711

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

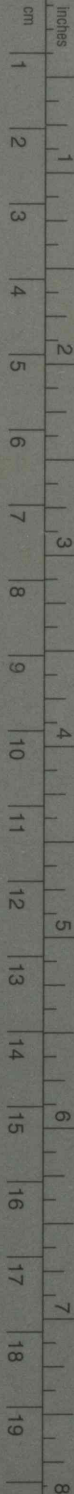


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

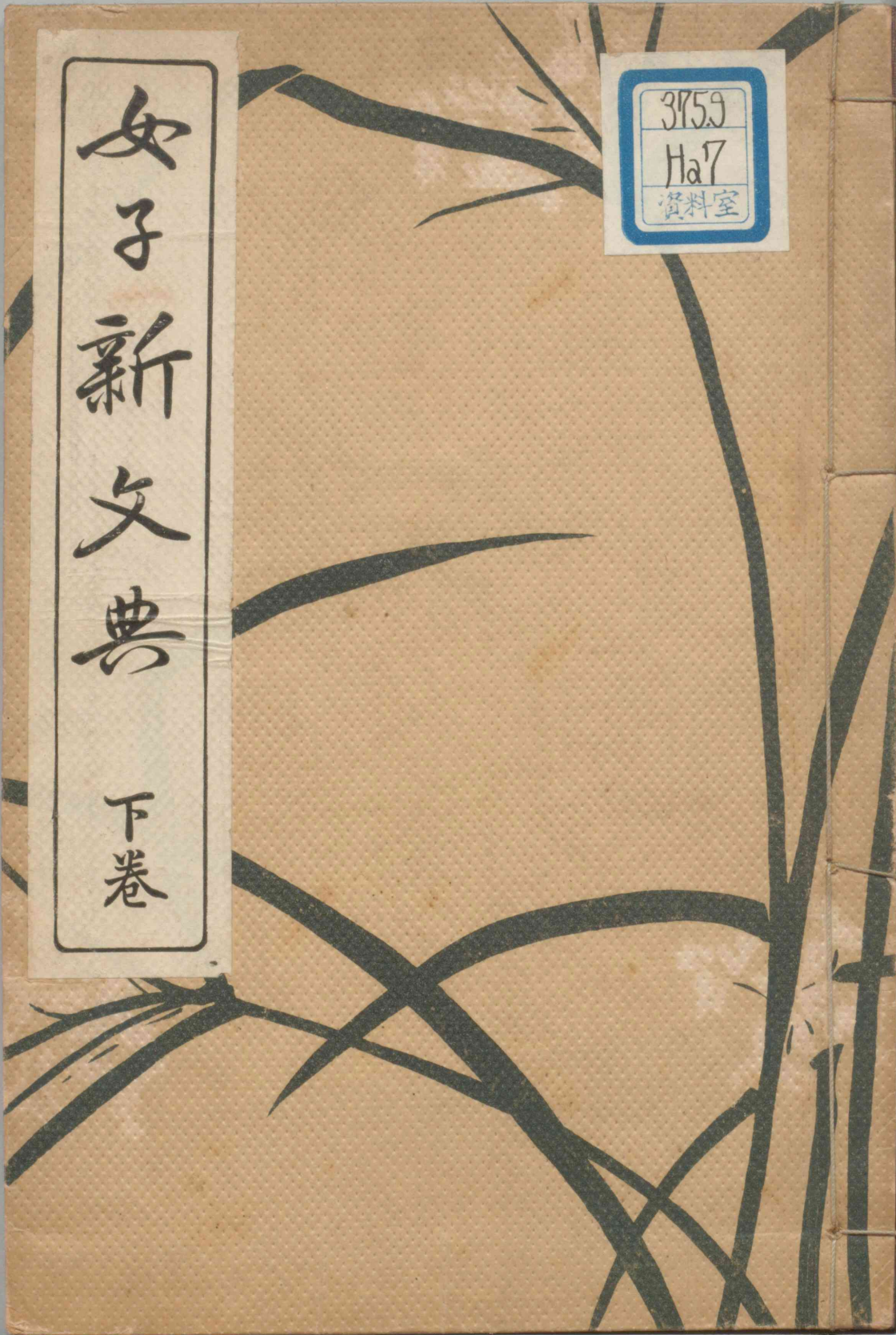
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



375.9
Ha7
資料室

女子新文典
下卷



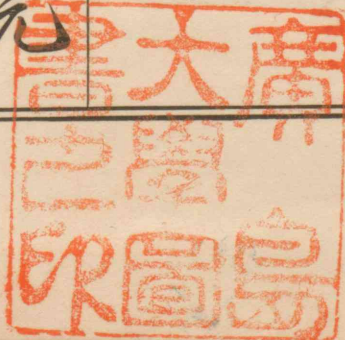
日四十二月一年二十正大
濟定檢省部文
用科教科語國校學女等高

文學博士芳賀矢一著

女子新文典

東京

會社資育英書院



P

女子新文典 下卷 目次

第三篇 文の構造

第十八章	主語、述語	一
	練習二二	四
第十九章	叙述の種類	五
	其の一、動詞の述語となる場合	六
	練習二三	一〇
	其の二、形容詞又は如しの述語となる場合	一一
	其の三、たりなり又は助詞の述語となる場合	一三
	練習二四	一四
第二十章	文の要素の節略	一四

目次

第二十一章	修飾語	一七
第二十二章	單文	一八
練習二五		二四
第二十三章	複文	二五
第二十四章	重文	二八
練習二六		二九
第二十五章	文の性質上の分類	三〇
第二十六章	係結の法則	三二
練習二七		三五
第四篇 正誤篇		
第二十七章	假名遣	三七
練習二八		四六

第二十八章	用言活用の誤	四七
練習二九		四九
第二十九章	用言と助動詞との連結の誤	五〇
練習三〇		五六
第三十章	助詞の誤	五七
練習三一		六三
第三十一章	係結の誤	六五
練習三二		六五
附録一	文典應用問題	六七
附録二	文法上許容に關する事項	七一



女子新文典 下巻

文學博士 芳賀矢一著

第三篇 文の構造

第十八章 主語、述語

〔壺〕 單語が集つて文を成す。文典上の文といふのは單語が
 集つて纏つた一つの考思想をいひあらはしたものをいふ。

(イ) 氷は水より出でて

(ロ) 水よりも寒し

(イ) (口) ともに單語の集つたものであるが、未だ文といふ事が出来ない。(イ) (口) を合せて、

氷は水より出で、水よりも寒し。

といふにいたつて、一つの纏つた思想をあらはして、始めて文となる。

〔叁〕 凡そ文にはその題目となるものがあり、その題目に就いて、何事かを叙述するのである。例へば犬、花に對して「吠ゆ」「散りたり」の如き叙述あり。「犬吠ゆ」「花散りたり」といふ文をつくるのである。文の題目となるものを主語といひ、文の叙述をなすものを述語といふ。それ故に、文の最も簡単な形に於ても、少くとも一つの主語と一つの述語とを含まなければならぬ。この例でいへば、犬、花は主語で吠

ゆ、散りたりは之に對する述語である。

〔老〕 主語と述語との關係、即ち叙述には三つの種類がある。口語でいへば、

- (一) 何がどうする。
- (二) 何がどんなだ。
- (三) 何が何だ。

〔次〕 「何がどうする」といふ關係を示す場合には、動詞がその述語となる。「犬吠ゆ」「花散りたり」の如きはこれである。

〔九〕 「何がどんなだ」といふ關係を示す場合には、形容詞形容動詞又は助動詞の如し、がその述語となる。

例、 水清し。
月明らかなり。

月銀の如し。

〔100〕「何が何だ」といふ場合は、助動詞のなりたり。〔五〕〔三〕参照又は助詞が、その述語となる。

例、日本は神國なり。東京は日本の都たり。

これは何の花ぞ。鯨は魚か。

〔注意〕此の場合に於ては、日本、東京、これ、鯨などの主語に對する述語は、むしろその下に來る神國、都、花、魚等である。けれども文の構造の上の説明としては、なり、たりの助動詞ぞ、かの助詞を述語と見做して置くのである。「五」の如しの場合も同様である。

練習二二

左の文の主語、述語を問ふ。

- 一 鶏鳴曉を告ぐ。
- 二 月東山に上る。
- 三 海棠といふもの、こまやかに麗しき花なり。
- 四 疑は人間に在り。
- 五 仁者は山を樂しむ。
- 六 風捲き、雨奔り、電閃き、雷轟く。
- 七 美しき虹西方に現る。
- 八 一天墨の如し。
- 九 桃の花も生けられたり、菱餅も、お煎りも、白酒も供へられたり。
- 一〇 春は來ぬ、春は來ぬ、霞よ、雲よ、ゆるぎ出で、氷れる空をあたくめよ、花の香おくる春風よ、眠れる山を吹きさませ。

第十九章 叙述の種類

其の一 動詞の述語となる場合

〔101〕 月 出づ。

鶯 鳴く。

此の二文は述語のみで、「何がどうする」といふ関係の叙述が十分にわかる。

〔102〕 子 似る。

氷 なる。

此の二文は述語の動詞のみでは、「子が何に似るか」「氷が何になるか」明瞭でない。

子 母に 似る。

氷 水と なる。

のやうに「何に」「何との如き問に對する語を加へて、叙述

が始めて完全する。

〔103〕 母 泣かる。

實朝 殺さる。

敵 退却せしめらる。

右の諸文も此の儘では、「何にどうせらるゝか」分明でない。泣くもの、殺すもの、退却せしめるものが、他に無くてはならぬ。

母 子に 泣かる。

實朝 公曉に 殺さる。

敵 我が軍に 退却せしめらる。

として、叙述が始めて完全になる。

〔104〕 義經 討つ。

猿 落す。

我が軍 退却せしむ。

右の諸文も此の儘では、何をどうするのか「不分明である。

義經 平氏を討つ。

猿 柿を落す。

我が軍 敵を退却せしむ。

として始めて明白になる。

〔104〕教師 授く。

頼朝 討たしむ。

お花 改む。

以上の文も此の儘では、何がどうする「の關係が理解し難い。「教師は何を授くるか」「頼朝は何を討たしむるか」

「お花は何を改むるか」

教師 文法を授く。

頼朝 平氏を討たしむ。

お花 名を改む。

や、明白になつたが、教師は文法を誰に授くるか」「頼朝は誰に平氏を討たしむるか」「お花は名を何と改むるか」これ等の問を充實しなければ、叙述の關係が未だ十分にいひあらはされない。

教師 生徒に文法を授く。

頼朝 義經をして平氏を討たしむ。

お花 名を改む。

として叙述が完全する。

〔106〕 以上述べたやうに、〔105〕以下は皆それ〴〵の語を補つて叙述を完全ならしめるのである。

述語の意義を補つて叙述を完全ならしめる語を補語といふ。

〔注意〕 補語はを、に、より等の助詞によつて導かれたのが多い。

練習二三

左の文の中から動詞の叙述を助ける補語を見出せ。

- 一 猫鼠を捕ふ。
- 二 能ある鷹は爪をかくす。
- 三 金澤の兼六公園は日本三公園の一と稱せらる。

四 旅人路を巡查に問ふ。

五 父財産を太郎と次郎とお花とに譲る。

六 姉は母に育てられ、妹は乳母に育てらる。

七 雀海中に入りて蛤となる。

八 西洋人は薔薇を花の王といふ。

九 荷物を馬車に載す。

一〇 二月十一日を紀元節と定め給ふ。

一一 朱に交れば赤くなる。

其の二 形容詞又は如しの述語となる場合

〔107〕 水清し。

月明らかなり。

右は述語のみで叙述が十分である。

〔108〕 六は 多し。

琵琶湖は 大なり。

右でも叙述をなすが、

六は 三より 多し。

琵琶湖は 中禪寺湖より 大なり。

といふ場合とは、叙述の意味が全く別である。

〔109〕 月 如し。

容貌 如し。

如しの述語である場合には、補語がなくては、叙述が全く

不分明である。(100)注意参照

月 弓の 如し。

容貌 愚なるが 如し。

其の三 たりなり、又は助詞の述語

となる場合

〔110〕 正成は なり。

東京は たり。

では「何が何だ」の関係が一向分らない。

正成は 忠臣 なり。

東京は 帝都 たり。

の如く、補語を加へなければならぬ。(100)注意参照

〔111〕 これは 梅の花 か。

鏡は 女子の魂 ぞ。

かぞの助詞を述語と見做せば、梅の花、女子の魂の

補語を加へて、何が何だ」の関係が明瞭になるのである。

(100) 注意参照

練習二四

左の文の中から叙述を助ける補語を見出せ。

- 一 月日は矢の如し。
- 二 不義の富は浮雲の如し。
- 三 時は金なり。
- 四 筆は劍よりも鋭し。
- 五 天色暗澹晝なほ夜の如し。
- 六 蕎麥の花雪よりも白し。
- 七 人は萬物の靈なり。

第二十章 文の要素の節略

〔三〕 文の主語、述語、補語等は文を組立てるに大切な部分で

あるから文の要素といふ。けれども都合によつては、之を省くことが珍しくない。

枝を折るべからず。

車馬を乗入るべからず。

のやうな命令文には、主語を省くことが常である。

詔して家毎に孝經一本を藏せしむ。

頼朝を征夷大將軍に任ず。

明後日參上致すべし。

など皆主語を省いた例である。國語には主語を省く例が極めて多い。

〔三〕 伏して冀くは御賛成あらんことを。(乞ふ)
塵もつもれば山(となる)

牛に引かれて善光寺参り(をす)

勉強は幸福の母(なり)

これ等は述語を省いた例である。

〔二四〕(友を)待てどもくゝ来らず。

昨年より繪畫を(誰先生に)學べり。

(人より)貫ふものは夏も小袖。

これ等は補語を省いた例である。

〔二五〕敷島の大和心を人間はゞ朝日に匂ふ山櫻ばな。(と答へ

ん)

應々と(主人は)いへど(客は)たゞくや雪の門。

(人は)花より團子(を)愛す)

和歌、俳句、諺などでは文の要素を省くことが極めて多い。

第二十一章 修飾語

〔二六〕文には文の要素の外、文の要素を形容し、或はその意味を限定するに用ひる語がある。之を修飾語といふ。

〔二七〕左の例によつて、最も簡単な文が、種々の修飾語を加へて、次第に複雑になつてゆく有様を知るがよい。

1. 猫 鼠を 捕ふ。

2. 小き猫大なる鼠を捕ふ。

3. 小き黒毛の猫大なる白き鼠を捕ふ。

4. 禪寺の小き黒毛の猫縁の下の大なる白き鼠を捕ふ。

5. 禪寺の甚だ小き黒毛の猫縁の下の極めて大なる白

き鼠を巧に捕ふ。

6. 隣。の。禪。寺。の。甚。だ。小。き。黒。毛。の。猫。縁。の。下。の。極。め。て。大。な。る。白。き。鼠。を。最。も。巧。に。捕。ふ。

7. 此。の。頃。時。々。隣。の。禪。寺。の。甚。だ。小。き。黒。毛。の。猫。わ。が。家。の。縁。の。下。の。極。め。て。大。な。る。白。き。鼠。を。最。も。巧。に。捕。ふ。

右のやうに修飾語の上に修飾語を加へれば、尙いくらでも附け加へることが出来る。けれども實際の文には、こんな多くの修飾語を加へることは稀である。

第二十一章 單文

〔二八〕 1. 猫鼠を捕ふ。

2. 隣の禪寺の小さい黒毛の猫縁の下の甚だ大なる白き鼠を最も巧に捕ふ。

右の二文は長さでは非常に相違があるけれど、主語は猫、述語は捕ふ、何がどうする」といふ關係、即ち主語と述語との關係は唯一回成立したのみである。後者は修飾語を加へて、文の形の複雑になつたのに過ぎない。

〔二九〕 猫、鼠、狐、馬、牛、象、獅子、虎は哺乳獸なり。

此の文には主語は猫、鼠、狐、馬、牛、象、獅子、虎の八つがある。之を書分けて別々の述語を持たせると、

猫は哺乳獸なり。

鼠は哺乳獸なり。

狐は哺乳獸なり。

馬は哺乳獸なり。

牛は哺乳獸なり。

象は哺乳獸なり。
 獅子は哺乳獸なり。
 虎は哺乳獸なり。
 の八文となる。然るに、こゝには之を引纏めて、八つの主語に、一つの共同述語を持たせたのである。即ち



で「何と何と何と何とが何だ」といふ關係を示してゐる。

〔三〇〕農夫は耕作し、收穫し、租税を納む。

右の文の主語は一つで、述語は耕作し、收穫し、納むの三つである。之を書分けければ、

農夫は耕作す。

農夫は收穫す。

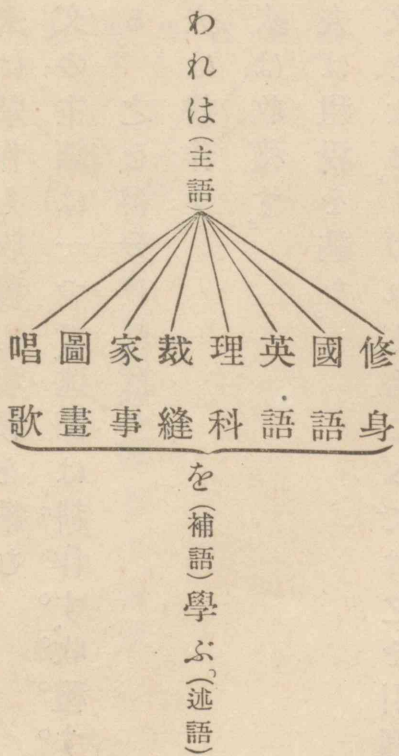
農夫は租税を納む。

の三文となる。けれどもこゝでは之を引纏めて、共同の主語を持たしめたのである。即ち



で、此の關係は「何がどうして、どうして、どうする」である。
〔三〕 われは學校にて、修身、國語、英語、理科、裁縫、家事、圖畫、唱歌を學ぶ。

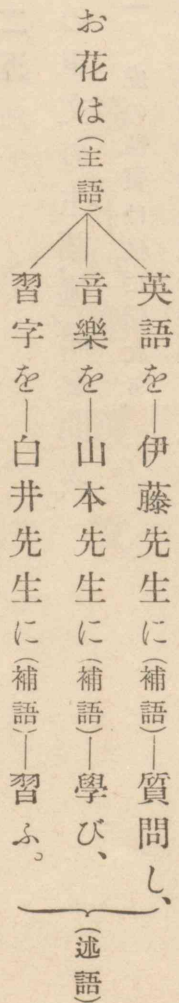
右は多くの補語を有する場合で、之を表示すれば、



である。

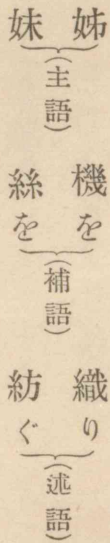
〔三〕 お花は英語を伊藤先生に質問し、音樂を山本先生に學び、習字を白井先生に習ふ。

これは補語、述語ともに、二つ以上をもつた文の例である。



〔三〕 姉と妹とはともに機を織り、絲を紡ぐ。

これは共同主語が共同述語をもつた例である。



「何と何とがどうして、どうする」といふ關係である。

〔四〕 以上〔二〕から〔三〕までの例を見よ。主語、述語、補語の數の

多少に係らず、主語と述語との關係は、文法上の形式即ち文を構成する形式に於ては、いづれも唯一回成立して居るのである。

か・く・の・如・く・主・語・と・述・語・と・の・關・係・が・文・法・上・の・形・式・に・於・て・唯
一・回・成・立・し・て・ゐ・る・も・の・を・單・文・と・名・づ・け・る。

練習二五

左の單文の主語、述語を問ふ。

- 一 虎の性質は猫に似たり。
- 二 満堂の紳士淑女皆泣けり。
- 三 木曾山には檜杉松等の良材多し。
- 四 動物は互に生存を競争し、或は居處を争ひ、或は食物を争ふ。
- 五 余は六時に起き、八時に學校に出で、正午家に歸る。

- 六 父母や我を生み、我を養ひ、我を長せしめ、我を教ふ。
- 七 木々の緑も、浮べる雲も、秀づる山も、流るゝ溪も、峙つ崖も、吹來る風も、日の光も、鶏の聲も、空の色も、皆自ら憂世のものにあらず。

第二十三章 複文

〔三五〕 1. 秋風吹く。

2. 猫鼠を捕ふ。

3. 余は六時に起き、八時に學校に出で、正午家に歸る。

右はいづれも單文である。

- 1. 秋風吹けは……………
- 秋風吹けども……………
- 秋風吹く時……………

「猫鼠を捕ふれば……」

2. 「猫の鼠を捕ふるに……」

「猫の鼠を捕ふる方法……」

3.

「余は六時に起き、八時學校に出で、正午家に歸るが、

余は六時に起き、八時學校に出で、正午家に歸るを、

余が六時に起き、八時學校に出で、正午家に歸る「習

慣……」

右のやうに文が助詞に連り、又は體言に連つて、更に大きな文の一部分となることがある。かゝる場合には、その文は獨立を失ふので、之を句と稱へる。

文が獨立せず、他の文の一部分となつたものを句といふ。

〔三六〕 1. 月滿つれば缺く。

2. 詩人は「秋風の吹く」を悲しむ。

右の二文中(1)は「何がどうして、どうする」といふ關係故、單文である。(2)は「何が何のどうする」のをどうする」といふ形式で、文の中に獨立を失つた文即ち句を含んで居るかやうに、文の中に句を含んでゐる文を複文といふ。

一つ以上の句を含んで、主語と述語との文法上の關係が二回以上成立してゐるものを複文といふ。

〔三七〕 正成答へて「陛下願はくは御心を安んじ給へ」と奏す。右のやうに獨立した單文を含んでゐるものも亦、複文である。

第二十四章 重文

〔三〕 秋風吹く。木の葉落つ。

猫鼠を捕ふ。犬夜を守る。

右は四つの單文である。

「秋風吹け」ども、木の葉落ちず。

「猫鼠を捕ふれ」ども、犬夜を守らず。

右の如くいへば、二つの複文が出来る。

秋風吹き、木葉落つ。

猫は鼠を捕へ、犬は夜を守る。

右のやうにいふ時は、上の文は獨立を失つて、更に大きな文の一部分となることは、句の場合に似て居る。けれど

もこの場合には上の文は下の文の附屬とはならない。下の文と同等に對立して居る。

か・く・の・如・く・文・の・中・に・あ・つ・て・同・等・に・並・立・す・る・も・の・を・文・の・節・と・い・ひ、二箇以上の節を含む文を重文といふ。

〔三〕 春來れども花咲かず、秋立てども葉落ちず。

右の各文節は複文である。複文を重ねたものも亦重文である。

練習二六

次の文について、單文、複文、重文を區別せよ。

- 一 花咲き、鳥啼く。
- 二 齊昭深く心を農事に用ひ、親しく稼穡の勞苦を察せり。

- 三 豹は死して皮を留め、人は死して名を留む。
- 四 田子の浦ゆうち出て見れば真白にぞ富士の高根に雪はふりける。
- 五 樹静かならんと欲すれども、風やます。
- 六 隣の家に蔵が立てば、こちらでは腹が立つ。(口)
- 七 月霜の如く地にさえ、風海の如く空に吼ゆ。
- 八 風はげしく吹き出で、よろぼひたる家を打倒し、樹の枝をさへ折裂きなどす。

第二十五章 文の性質上の分類

〔三〇〕 紫式部は古今の才媛なり。
地球は一年を以て太陽を一周す。
かやうにすなほに叙述した文を平叙文といふ。

〔三一〕 三と三との和幾何。

誰か鳥の雌雄を辨ぜん。
いづくんぞ然らん。

右のやうに疑問又は反語の意を含むやうに書いた文を疑問文といふ。

〔三二〕 人の短をいふことなかれ。
辨當持參にて來れ。

人のふり見てわがふり直せ。
右のやうに命令の意を示すやうに書いたのを、命令文といふ。

〔三三〕 嗚呼悲しきかな。
歎ずべきかな。

右のやうに、感動の意を示すものを感動體の文といふ。

〔二五〕我等は平叙文だけで、何事もいひあらはすことが出来るけれども、これでは單調を免れない。この四體の文を混用して、文章の變化を多くするのである。

第二十六章 係結の法則

〔二六〕普通の順序によれば、述語は文の最後に來るものである。但しその結び方は文體によつて異なつてゐる。

正成は忠臣なり。

これぞ夫の一大事なる。

吹來る風なんなまぐさき。

我こそは無官の大夫敦盛なれ。

人こそ知らねかわく間もなし。

以上はいづれも平叙文である。平叙文の結方に就いては、左の事を記憶するがよい。

(一) 上にぞ、なんの助詞がある時に限り、述語は連體形で結ぶ。

(二) 上にこそその助詞がある時に限り、述語は已然形で結ぶ。

〔二七〕雪ぞ降出でたれば、……

この心得こそ何人も守るべきに、……

右のやうに句の中にあらはれたや、か、ぞ、こそその類は最後の述語の上に、何の影響も及ばさないのである。

〔二七〕舜は何人ぞ。

有りや。無しや。
霞か。雲かは。た雪か。
之を知らぬ人やある。
父や。こひしき。

誰か。之を信ずべき。

以上はいづれも疑問文である。疑問文では、ぞ、や、かのやうな疑問の助詞で結ぶことが普通である。然るに、述語の用言(若しくは助動詞)が最後にあらはれる時は、連體形で結ぶのである。

〔二六〕 知らざるを知らずとせよ。

枝を折るな。

涙あるものは泣け。

己の長をいふことなかれ。

右はいづれも命令の文である。命令の文ではよ、なのやうな命令の助詞が最後に來るか、さうでなければ命令形で結ぶのである。

但しべしはもと推量の助動詞から轉じて、命令の意をいふやうになつたので、これは終止形で結ぶのである。

例 師の教を奉ずべし。

父母の命に背くべからず。

〔二五〕 嗚呼悲しいかな。

感動體の文では、感動の助詞が最後に來る。

練習二七

次の文に係結の誤があるなら正せ。

- 一 この偉人を生める母の人格こそその子にも優りて傳ふべきなり。
- 二 跡白浪と逃失せたる。
- 三 目に見えぬ神の心に通ふこそ人の心の誠なりけり。
- 四 今か、と待ちたりける。
- 五 帆は風に取りられ、楫は浪に碎かる。
- 六 花ぞむかしの香に匂ひけり。
- 七 有合ふ人々、皆鎧の袖をぞぬらしけり。
- 八 好きこそ物の上手なり。
- 九 これなん世に名高き不破の關屋なる。
- 一〇 かぐままでに國家に盡す人こそ有難き。
- 一一 智者は惑はぬ、仁者は憂へぬ、勇者は恐れぬ。
- 一二 池水にみぎはの櫻散りしきて、波の花こそ盛なりけり。

第四篇 正誤篇
第二十七章 假名遣

[150]

- 1. 書きて 書いて イの音になる。
咲きて 咲いて
- 2. 問ひて 問うて ウの音になる。
- 3. 死にて 死んで
飛びて 飛んで 撥ねる音になる。
讀みて 讀んで
- 4. 勝ちて 勝つて
取りて 取つて 促る音になる。
食ひて 食つて

動詞の助詞がてに連る時には、右のやうに音の變化を來すことがある。之を動詞の音便といふ。下の段の音便の形は、口語にも文語にも用ひる。右の中誤り易いのは、(1)(2)(3)である。(1)と(2)とは母音に轉じたものゆゑ、必ずい、うを用ひなければならぬ。然るに往往、ひ、ふを用ひるのは動詞の活用にひ、ふのものが多し所から紛れたのである。

天を仰[△]ひて歎[△]ず。

況や余におひ[△]てをや。

子を思[△]ふて眠[△]らず。

幾度訪[△]ふても逢[△]はず。

願[△]ふてもなき仕合なり。

いづれもい。又はうに改むべきものである。

(3)はに、び、みの音が撥ねる音に轉じたものゆゑ、んの假名を用ひなければならぬ。むを用ひるは誤である。舌を嚙[△]むで死す。

飛[△]むで火に入る夏の蟲

死[△]むで花實が咲くものか。

これ等は皆んに改めなければならぬ。

(二四) 悲しきかな。 悲しいかな。

之を久しくす。 之を久しうす。

形容詞の活用きくも亦音便でい、うの母音に轉ずる。かういふ場合にひ、ふを用ひるのは許し難い誤謬である。 天勾踐を空し[△]ふする勿れ。

昨日は御見舞を辱ふし謝し奉り候。

歌は言を永ふす。

久しひかな余の君を見ざりしこと。

善ひかな言や。

皆い。又はうに改めなければならぬ。

〔四〕 つきたち ついたち(朔)

あきひと あきうど(商人)

てみづ てうづ(手水)

かみかき かうがい(筭)

名詞にも音便がある。音便の場合には母音の假名を用ひるので、ひ、わ、ふ等を用ひるのは誤である。キサキノミヤ。キサイノミヤ。

やひば(双)

ヤキバ

ヤイバ

おとふと(弟)

オトヒト

オトウト

かふべ(神戸)

カミベ

カウベ

こふち(小路)

コミチ

コウヂ

〔四〕 歎ずるに堪へたり。

能く教ふべし。

之を強ふべからず。

岡に生ひたるは松の木なり。

堪ふ(下二)教ふ(下二)強ふ(上二)生(上二)はいつれも八行に活

用する語である。然るを文法を學ばぬ人は、堪ゆ、教ゆ、

強ゆ、生ゆの如く、ヤ行に活用させることがある。左の如

きは皆誤である。

強いて詮議するに及ばず。
惜しむの情に堪えず。
教ゆるは習ふの半ばなり。
生いゆく先こそ樂しけれ。

〔二四〕

土地肥えたり。

病愈ゆ。

燈消えず。

國は富み榮ゆべし。

錢多く費えたり。

肥ゆ、愈ゆ、消ゆ、榮ゆ、費ゆ等はいつれもヤ行下二段

の動詞である。されば、ハ行又ワ行に書くのは誤である。

年を経て未だ愈へず。

家大に榮ふ。

秋高く馬肥ゑたり。

雪まだ消へず。

〔二五〕

老いぬれば同じことこそせられけれ。

死して悔いず。

恩を受けては必ず報いよ。

老ゆ、悔ゆ、報ゆはヤ行上二段の動詞である。然るに之

をもハ行ワ行に誤る人がある。

老ひては子に従ふ。

悔ゐれども及ばず。

恩に報ふべし。

〔二六〕

山に木を植うべし。

年大に饑う。

花瓶を卓上に据ゑたり。

植う、饑う、据う(下二は皆ワ行に活用する語である。之

をヤ行、ハ行に誤らぬやう注意せよ。

庭には池を穿ち、園には花を植ゆ。

饑へては食を擇ばず。

傍に三脚の椅子を据へたり。

〔三〕

變ふ——變はる。

加ふ——加はる。

賜ふ——賜はる。

合ふ——合はす。

愈やす——愈ゆ。

肥やす——肥ゆ。

費やす——費ゆ。

右の如きは、上下いづれか一方の動詞の活用を知れば、他方の動詞の假名遣も自ら明瞭になる。

〔四〕 山に攀づ。

衆に抽んづ。

ず、づの音も亦誤り易いが、サ行變格動詞の外にはサ行に活用する動詞はまず(交混)の一語があるだけである。それ故その他はすべてダ行と思へばよい。

〔五〕 動詞の連用形は皆名詞となる形である。例へば、はさみ、はかり、ほり、かすみ、くもり、ねむりなどの類である。故に左の如き名詞は動詞の活用を知れば、その

假名遣を誤ることなく、名詞の假名遣を知れば、動詞の活用も自ら知られる。

ねがひ。うたひ。うらなひ。たゝかひ。
きこえ。みえ。はち。をしへ。

練習二八

左の文について假名遣の誤を正せ。

- 一 學業衆に秀す。
- 二 唯幾千代とも祝い納め申候。
- 三 瀧の音は絶へて久しくなりぬれど。
- 四 口を衝ゐて浮び出す歌に興がりしこともありき。
- 五 日ぐらし硯に向いて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかと書きつくれば、あやしふこそ物ぐるほしけれ。
- 六 幾千本となく植へつらねたり。

- 七 蠶室毎に三四人の人ありて之を養えり。
- 八 兄二人、おとふと一人、いもふと二人あり。
- 九 大みけしきうるはしふ馬車に召させ給へば、親王大臣たちを始め、宮内官數をつくして御供つかふまつれり。
- 一〇 行儀作法の要はまづ其の心を正しふするに在り。

第二十八章 用言活用の誤

〔一五〕 棄[△]てる[△]神あれば助[△]ける[△]神あり。
 棄[△]てる[△]。助[△]ける[△]は口語の活用で文語の活用ではない。文語では棄[○]つる[○]、助[○]くると言はなればならぬ。

〔一五〕 生[△]るる時より死[△]ぬ時[△]まで。
 國家の繁榮を期[△]待[△]す所以なり。

終止形と連體形とを誤つたのである。(六)(六)練習一八參照)

〔三五〕人學ばずば道[△]を知らず。

塵も積らば山[△]となる。

金剛石を磨かざれば玉の光は無からん。

未然形と已然形とを誤つたのである。(七)(七)練習一九參照)

〔三五〕舟沈む 舟を沈む。

家焼く 家を焼く。

家建つ 家を建つ。

右の例を見よ。同じ動詞のやうにみえるが、實は全く別の動詞である。口語で言試みれば、沈ムと沈メルと、焼ケルと焼クと、建ツと建テルと上下自ら異なることが分らう。よく口語に照し合せて考へれば、次のやうな誤を生ずること

はなからう。

大工の家を建つ技術は。

餅を焼くるは妹の役なり。

日頃憂に沈めたりし身は。

〔二番〕河豚は食ひたし命は惜し。

あな勇ましし勇まし。

形容詞の活用にしを重ねることは古文にはない。(三)及び本

卷附録二參照)

練習二九

左の文に活用の誤があるなら直せ。

- 一 第一の鈴にて身支度を整ひ、第二の鈴にて食堂に入る。
- 二 子供を育つは婦人の務なり。

- 三 死すべき時に死さざれば死ぬにまさる恥あり。
- 四 春風吹きて、池の氷も解き初めたり。
- 五 昨夜の火事にて、本町通三十軒ばかり焼きたり。
- 六 心を潜みて工夫すべし。
- 七 了解せずば幾度も聞く。
- 八 かゝる御歌を御詠ありたる其の世いと恨めしく口惜し。
- 九 若き時に學ばざれば、老ひて後悔あるべし。
- 一〇 東京の近傍には、暑を避けるに適したる場所少からず。

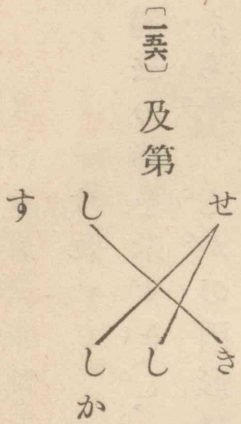
第二十九章 用言と助動詞との連

結の誤

〔二重〕書けり、取れり、感ぜり、信ぜり。
完了の時を示す助動詞り(ら、り、る、れ)は右のやうに四段の動

詞サ行變格の動詞に限つて、其のエ段の音から連るものがある。然るに下二段の動詞にも亦エ段の音があるので、堪へり、受けりの如く誤り用ひることがある。次の如く書くのは皆誤である。

1. 終夜眠らずして考へり。
2. 一旦再興せしが遂にまた絶えり。
3. 數年間伊藤先生の薰陶を受けり。
4. 所定の學科を修め、正に其の業を卒へり。



する
すれ

過去の時を示す(し、し)はサ行變格に限り、その未然形せからし、しかの兩形に連るのである。それ故及第し、人及第し、かどもなど書くのは誤である。

1. この寺を建立し、は今より二千年以前なり。
2. 募集し、しかども應募者なかりき。
3. 開會し、は四日、閉會し、は十一日なりき。

〔二毛〕

落つべし 落つまじ。

聞ゆべし 聞ゆまじ。

信ずべし 信ずまじ。

推量の助動詞にはラ行變格及びワ行變格と同様に活用す

るものゝ外は、皆右のやうに終止形から連るのである。次の如く連體形から連るのは誤である。

塵芥を捨つるべからず。

決して許さるゝまじ。

〔二毛〕

落つるなり。

聞ゆるなり。

信ずるなり。

なりは連體形に連るものである。然るに、前項と反對に、落つなり、「聞ゆなり」「感ずなり」など誤ることがある。左の例は皆誤である。

1. 余は飽くまでかく信ずなり。
2. 恰も電光の如く忽ち現れ、忽ち消ゆなり。

3. 甚だ不思議に覺ゆなり。

〔二五〕

(受身)

使役

(使役の受身)

(四)

讀ま

(ラ變)

あらる

す

せらる

(ナ變)

死な

す

(上二)

起き

す

(下二)

棄て

す

(上一)

見

す

(下一)

蹴

す

(サ變)

信ぜ

す

(カ變)

來

す

右のやうに、受身及び使役には二通ある。る、す、せらるは四段、ラ行變格、ナ行變格即ち未然形にアの音を有する動

詞から連り、らる、さす、させらるは他の六種に連る。サ行變格の受身、使役、使役の受身等を左の如くいふことは古文にはないが、今は許容されてゐる。(附録二参照)

(受身)

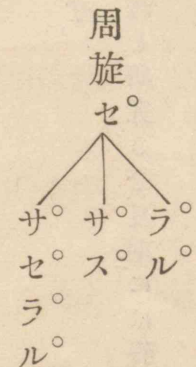
周旋サ[△]ル

(使役)

周旋サ[△]ス

(使役ノ受身)

周旋サ[△]セラル



〔二六〕

(四)

讀ま

(ラ變)

有ら

(ナ變)

死な

(上二)

起き

(下二)

棄て

(上一)

見

(下一)

蹴

しむ

(サ變) 信ぜ
(カ變) 來キ來

使役の助動詞しむは右に示すやうに、一樣に各種の動詞の下に附く。故に得(下二)見る(上一)は「得しむ」「見しむ」となるのが至當である。然るに近年は「得せしむ」「見せしむ」の如くせを挿みて用ひることが多い。(附録二参照)

練習三〇

左の文に連結の誤があれば正せ。

- 一 常には數百名の生徒を置きて學理を研究させ、夏期には養蠶の術を學ばしむなり。
- 二 此の處に車を乗入るゝべからず。
- 三 塵芥棄てるべからず。
- 四 内地の需要少からざるのみならず、多く外國にも輸出さる。

- 五 楠正成、正行、正儀、菊地武光、兒島高德などの畫像をも御覽じらる。
- 六 武内の久しき齡に似させ給へと、武者人形取添ひ奉り候。
- 七 勉強しゝかども落第したり。
- 八 御克己の徳に富ませ給へる、いとゝ忝し。
- 九 先生の此の言は、あへて女子をそしり辱めたるにあらず。全く親切の心よりして、深く女子を教誡されたるなり。
- 一〇 識古今に通じ學東西を兼ねり。
- 一一 余今師の君と東西數千里を隔てり。
- 一二 法皇忠盛に仰せて、之を射さしめらる。
- 一三 讀書せんと欲する志あるものには必ず其の時間の與へらるものなり。

第三十章 助詞の誤

〔二六〕一粒の收穫だに無し。

鳥すら恩を知る、況や人をや。

風吹き雨さへ降る。

だに、すらは物を比較して其の軽いものを舉げるときに用ひ、さへはあるが上に物の重る意の助詞である。だに、すらは今は多くさへと混用してゐる。

鳥さへ恩を知る、況や人をや。

一粒の收穫さへ無し。

〔二七〕前へ進め。右へ向け。

東京に着く。君に渡す。

には時間にも場處にもせよ、或定つた點を指すに用ひ、へは方向を示すに用ひる。此の區別が口語では混同してゐる

から、文語文を書く時も、往々次のやうな誤謬を犯すことがある。

1. 一帆南に向ひ一帆北に向ふ。

2. 午後六時京城へ着す。

3. 牡丹餅を棚へ載す。

〔二八〕春と秋といづれがよき。

國語と教育との關係。

右の如くとは必ず繰返すべきものである。然るに今は下のを略すことが珍しくない。

五と三の和は八なり。

日本と西洋の富を比較すれば……………

右の如き場合には、とを略しても誤謬を生じない。併し、

五と三の自乗の和は幾何。
日本人と西洋人の子供を比較すれば……………
の如き場合には次の二様に解せられる。

- 1. 二十五と九との和は三十四。
- 2. 五と九との和は十四。

- 1. 日本人の子供と西洋人の子供とを……………
- 2. 日本人と西洋人の子供とを……………

かくの如く誤謬を生じ易い場合には、とを繰返すことを忘れてはならぬ。

〔二番〕 歸りたりといふ。

見たる人なしとぞ。

かくの如く言切る形即ち終止形から、とに連るのが本體で

ある。今は「歸りたる」といふ。「見たる人なし」とも用ひる。(附録二参照)

〔三番〕 (1) 如何なる理由ありとも。如何に美麗なりとも。

(2) 悔ゆれども及ばず。花麗しけれども刺あり。

右の如くとも、どもは上下相反する時に用ひる助詞である。

(1) は未然の意を有し、(2) は已然の意に用ひる。

よむとも盡きじ。よめども盡きず。

言ふとも聴かじ。言へども聴かず。

〔四番〕 前項のとも、どもの代りに、今はもを用ひる。

何等の理由あるも(アリトモ)説明せず。

これは疑問を生ずることが無い。

客は多きも(ケレドモ)買手は少かるべし。

これは二様に解釋し得られる。(附録二參照)

〔六七〕我が思ふ人はありやなしやと。

汝は日本國民にあらずや。

これは疑問の助詞のやである。右の例の如く終止形から
續くのが本體である。然るに今はあるや、なきやなど、

用ひる人が多い。

あるか、なきか。

汝は日本國民に非るか。

かも知同じく疑問の助詞である。これは連體形から續くの
である。

〔六八〕疑問文でいつ、いくつ、誰、幾許、何處の如き疑問
をあらはす詞が上に來るときには、下の疑問の助詞はやを

用ひないでかを用ひるのが本體である。

1, いつまでかくてあるべきか。

2, いつ出發し給ふか。

3, 年はいくつにかなり給へる。

4, 誰かある。

然るに今は、

其の答幾何なるや。

何時歸れるや。

などと用ひる人が多い。

練習三一

次の文に誤があるなら正せ。

一 讀本と文法の下巻を學ぶ。

- 二 まづ其の有益なるや、はた無益なるやを考ふべし。
- 三 數日の旅行に過ぎざりしも、得る所は甚だ大なりき。
- 四 吉野山の麓なる塔の尾の陵に葬り給ひしとぞ。
- 五 學校より公園までは何町ばかりあるや。
- 六 何人にてやおはすらん。
- 七 天は耳なきも聽く。
- 八 甲と乙といづれを選ぶや。
- 九 多くの人に尋ねたれども、誰も知らざるべし。
- 一〇 二人は免さるゝに、などや御身一人残り留りたまふらん。
- 一一 夜深くなるまゝに雷すら鳴りはためきて。
- 一二 女のこれはしもと難つくまじきは難くもあるかな。
- 一三 幾多の困難に遭遇せしも、遂に屈することなかりしとぞ。
- 一四 大は小を兼ねるといへども、しやもじは耳かきの用をなさず。

第三十一章 係結の誤

【三充】ぞ、こ。その係に對しての結の誤は近世の文には頗る多い。第二十章を復習して、更に次の練習を試みよ。

練習三二

次の文に係結の誤があるなら直せ。

- 一 緑なる一つ草とぞ春は見き秋は色々の花にぞありける。
- 二 世の中は何か常なる飛鳥川、昨日の淵は今日は瀬になる。
- 三 船の數幾千百艘、これぞ聲援隊なるべしと、まづうなづかる。
- 四 檀原の遠つみおやの宮はしらたてそめしより國は動かす。
- 五 民をあはれませ給ふ御心の深さは、此の一事にても知られたる。
- 六 何とぞ根本の學問をせさせたきものなる。
- 七 そこひなき淵やはさわぐ山川の淺き瀬にこそ仇浪は立つ。

- 八 げに進みゆく御代のしるしにこそとおぼゆれ。
- 九 こはこれ婦女の鑑と世に知られし徳川三代將軍家光の乳母
春日の局その人なりけり。
- 一〇 村民一箇年の生活費は唯この數月間に得らるといふなる。
- 一一 柿本人麿なん歌の聖なりけり。
- 一二 女は心やはらかなるなんよけれ。
- 一三 一間の中にぞ入りにけり。
- 一四 天地の神やかためき萬代に立ちて動かぬ國の御はしら。

女子新文典 下卷終

附録一、 文典應用問題

次の文に假名遣や文法上の誤があつたら正せ。

- 一、 露ばかりもあはてさはげる色なし。
- 二、 山深み落ちて積れる紅葉のかはける上に時雨ふるなり。
- 三、 學問は如何なる時に於てすべきや。如何なる時が最もよく讀書に適するや。
- 四、 今日になつて菊作らふと思ひけり。
- 五、 名を聞ひただけでも優にやさしひ嫩草山は、見ても美しくなつかしひ山である。(ロ)
- 六、 兄弟は父母を同じふして生るものなれば、同根連枝といひて、木の根を一つにして、枝葉の分るにたとへたり。
- 七、 白紙を多く蓄ひ持てば、紙の蠹いつの間にか之を蝕ひ、フラネルを多く蓄ひ持てば、フラネルの蟲いつか之を食ふ。

- 八、女王ルイゼは婦徳殊にすぐれ、才色兼ね備へる女丈夫なりき。
- 九、負ふた子に髪なぶらるゝあつさかな。
- 十、疾病弔祭などにわたることはゆめ／＼語り出づるべからず。
- 十一、瓶子は酒なり水なりを盛りてこそ甲斐はあり。用ふることなく、箱にのみ藏め置かんは何の甲斐やある。
- 十二、轉むでも笑ふてばかり雛かな。
- 十三、雉の尾のやさしふさわる董かな。
- 十四、芭蕉いと高やかに延びて、莖は垣根の上やがて五尺を越へつべし。
- 十五、老ひたる親の瘦せたる肩もむとて、骨の手にあたりたるも、いとど心細さのやる方なし。
- 十六、行く川の流は絶へずして、しかも本の水にあらず。
- 十七、御供の人々もうちしほれて袖をしぼらぬはなかりし。
- 十八、やう／＼我が家の門を望み得るあたりまで、歸りつきたる時、尾をふり／＼、狗のはせ出で、迎ひたる、犬もまことにうれしかるべく、主も亦

うれしかるべし。

- 十九、むくつけき人の、思の外に親にはいとやさしふ仕ふ由聞きたるうれしさ。

- 二十、本家の人々も皆我が誠の足らざりしを悔ひ、うちよりて姑に孝養を盡すに至れり。

- 二十一、希くば活潑と輕佻を取違へず謙遜と卑屈を誤らぬやうにあれ。

- 二十二、道遠く行きて歸りて、今朝の事おもひば冬の日も長かりけり。

- 二十三、いと愛らしき花なれば毎年之を植ゆるに、今は庭になくてならぬものゝよふになりたり。

- 二十四、ふと蔓草を愛で思ふ心つきてより、瓢箪も植えき、絲瓜も植えき。

- 二十五、晝がくとも筆に及び難く、述ぶるとも詞に盡すこと能はず。湖は波靜にして席を布くが如く、船は帆を舉げて、一葉の水に浮ぶが如し。

- 二十六、交際の話柄として人を毀譽し褒貶するが如きは、女徳をそこなふるること、最も甚だしきものなり。

- 二十七、其の容貌愚なるが如きものありとも、文學の徳内に積るものありて、自ら外に現れんには、忽ち人をして敬愛の情を起さしむるに足る。
- 二十八、ナポレオンの歐洲を席卷するに及びて、普國も遂に其の馬蹄に蹂躪さるゝに至れり。
- 二十九、何時にても纜を解かんとなれば、何時にても水ある所に船をつなぐべし。
- 三十、病める夫の事稚兒の上あやにくに心にかゝりて、夜は更けぬれど、目も合はず。
- 三十一、主人自ら茶を點じてまらふどにすゝむれば、まらふどは一つの茶碗に點じたる茶を上座の人少し飲みて、次の人へ傳ふ。
- 三十二、人々の萬歳を唱ふ聲いとにぎわし。

附録二、文法上許容ニ關スル事項

- 一、「居リ」恨ム「死ヌ」ヲ四段活用ノ動詞トシテ用キルモ妨ナシ
- 二、「シク・シ・シキ」活用ノ終止言ヲ「アシシ」「イサマシシ」「ナド」用キル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ
- 三、過去ノ助動詞ノ「キ」ノ連體言ノ「シ」ヲ終止言ニ用キルモ妨ナシ
- 例 火災ハ二時間ノ長キニ亘リテ鎮火セザリシ
金融ノ靜謐ナリシ割合ニハ金利ノ引弛ヲ見ザリシ
- 四、「コトナリ」異ヲ「コトナレリ」「コトナリテ」「コトナリタリ」ト用キルモ妨ナシ
- 五、「、セサス」トイフベキ場合ニ「セ」ヲ略スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例 手習サス
周旋サス

賣買サス

六、「、セラル」トイフベキ場合ニ、「、サル」ト用キル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例 罪サル

評サル

解釋サル

七、「得シム」トイフベキ場合ニ「得セシム」ト用キルモ妨ナシ

例 最優等者ニノミ褒賞ヲ得セシム

上下貴賤ノ別ナク各其地位ニ安ンズルコトヲ得セシムベシ

八、佐行四段活用ヲ動詞ノ「シシカ」ニ連ネテ「暮シシ時」過シシカバ「ナドイフ

ベキ場合ヲ「暮セシ時」過セシカバ「ナドトスルモ妨ナシ

例 唯一遍ノ通告ヲ爲セシニ止マレリ

攻撃開始ヨリ陥落マデ僅ニ五箇月ヲ費セシノミ

九、てにをはノ「ト」ハ動詞、助動詞ノ連體言ヲ受ケテ名詞ニ連續スルモ妨ナ

シ

例 花ヲ見ルノ記

學齡兒童ヲ就學セシムルノ義務ヲ負フ

市町村會ノ議決ニ依ルノ限リニアラズ

十、疑ノてにをはノ「ヤ」ハ動詞形容詞助動詞ノ連體言ニ連續スルモ妨ナシ

例 有ルヤ

面白キヤ

父ニ似タルヤ母ニ似タルヤ

十一、てにをはノ「トモ」ノ動詞、使役ノ助動詞、及受身ノ助動詞ノ連體言ニ連

續スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例 數百年ヲ經ルトモ

如何ニ批評セラルルトモ

強ヒテ之ヲ遵奉セシムルトモ

十二、てにをはノ「ト」ノ動詞、使役ノ助動詞、受身ノ助動詞、及時ノ助動詞ノ連

體言ニ連續スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例 月出ヅルト見エテ

嘲弄セラルルト思ヒテ

終日業務ヲ取扱ハシムルトイフ

萬人皆其徳ヲ稱ヘケルトゾ

十三、語句ヲ列舉スル場合ニ用キルてにをは「ト」ハ誤解ヲ生ゼザルトキ

ニ限リ最終ノ語句ノ下ニ之ヲ省クモ妨ナシ

例 月ト花

宗教ト道徳ノ關係

京都ト神戸ト長崎へ行ク

最終ノ「ト」ヲ省クトキハ誤解ヲ生ズベキ例

史記ト漢書トノ列傳ヲ讀ムベシ

史記ト漢書ノ列傳トヲ讀ムベシ

十四、上ニ疑ノ語アルトキニ下ニ疑ノてにをは「ヤ」ヲ置クモ妨ナシ

例 誰ニヤ問ハン

幾何ナルヤ

如何ナル故ニヤ

如何ニスベキヤ

十五、てにをは「モ」ハ誤解ヲ生ゼザル限リニ於テ「トモ」或ハ「ドモ」ノ如ク用

キルモ妨ナシ

例 何等ノ事由アルモ(アリトモ)議場ニ入ルコトヲ許サズ

期限ハ今日ニ迫リタルモ(タレドモ)準備ハ未ダ成ラズ

經過ハ頗ル良好ナリシモ(シカドモ)昨日ヨリ聊カ疲勞ノ狀アリ

誤解ヲ生ズベキ例

請願書ハ會議ニ付スルモ(スレドモ)之ヲ朗讀セズ

給金ハ低キモ(ケレドモ)應募者ハ多カルベシ

十六、「トイフ」トイフ語ノ代リニ「ナル」ヲ用キル習慣アル場合ハ之ニ從フモ

妨ナシ

例 イハユル哺乳獸ナルモノ
顔回ナルモノアリ

理由書

國語文法トシテ今日ノ教育社會ニ承認セラル、モノハ徳川時代國學者ノ
研究ニ基キ專ラ中古語ノ法則ニ準據シタルモノナリ然レドモ之ニノミ依
リテ今日ノ普通文ヲ律センハ言語變遷ノ理法ヲ輕視スルノ嫌アルノミナ
ラズコレマデ破格又ハ誤謬トシテ斥ケラレタルモノト雖モ中古語中ニ其
用例ヲ認メ得ベキモノ尠シトセズ故ニ文部省ニ於テハ從來破格又ハ誤謬
ト稱セラレタルモノノ中慣用最モ弘キモノ數件ヲ擧ゲ之ヲ許容シテ在來
ノ文法ト並行セシメント期シ其許容如何ヲ國語調査委員會ニ諮問セ
シニ同會ハ審議ノ末許容ヲ可トスルニ決セリ依テ自今文部省ニ於テハ教
科書檢定又ハ編纂ノ場合ニモ之ヲ應用セントス

大正十一年十月五日 印刷
大正十一年十月十日 發行
大正十二年一月九日 訂正再版印刷
大正十二年一月十三日 訂正再版發行



著作
所
有

著 者 芳 賀 矢 一
發 行 者 合 資 會 社 育 英 書 院
印 刷 者 白 井 赫 太 郎

東京市小石川區竹早町三十二番地
東京市牛込區白銀町廿九番地
東京市神田區錦町三丁目十八番地

目 黑 甚 七
目 白 井 赫 太 郎

精 興 社

女子新文典 全貳册
定價 上卷 金貳拾壹錢
下卷 金貳拾壹錢
大正十四年度 上卷 金參拾八錢
臨時定價 下卷 金參拾八錢

發行所
發賣所

東京市牛込區白銀町廿九番地
振替口座(東京)七四二二番
東京市京橋區南傳馬町二丁目
振替口座(東京)二八〇九番

合資會社 育英書院
目 黑 甚 七
目 白 井 赫 太 郎

